

水俣学通信

第 2 号
2005.11.1

News from the Open Research Center for Minamata Studies



湯堂 - 1960年頃 (写真提供: 原田正純)

目 次

水俣学現地研究センターの オープンによせて …………… 2	2005年7~10月活動・調査報告 …………… 5
水俣学現地研究センター開設案内 …… 2	水俣学研究センター第1回公開セミナー
水俣学現地研究センター開所 記念式典 …………… 3	環境福祉学フィールドワークⅠ
カナダ先住民を迎えて …………… 3	環境福祉学フィールドワークⅡ
研究員報告 …………… 4	第22回天草環境会議報告
	大学院合宿「曾木発電所遺構の見学」
	宮崎市A地区コントロール検診
	今後の活動予定 …………… 8

水俣学現地研究センターのオープンによせて

水俣学現地研究センター・センター長 宮北 隆志



4月に発足した本学の水俣学研究センターと現地をつなぐ研究拠点としての「水俣学現地研究センター」が8月8日にオープンしました。水銀汚染による健康被害、生活被害の全容解明、関連資料の整理、データベース化と発信、地域再生モデルの提案という3つを柱とするプロジェクトの推進拠点として機能することになります。健康・医療相談、生活・福祉相談や市民講座の開催に向けた準備も進んでいます。

8月8日の開設記念式典、記念講演会、レセプションは、水俣病患者・家族、支援者、県、市町村の担当者、市民団体、地元産業界、本学関係者など約200名の参加を得て盛大に開催されました。記念講演会では、地元出身の民俗学者で日本地名研究所所長の谷川健一氏から水俣学研究センターに対する期待と激励の言葉をいただき大変うれしくまた同時に心強く思っています。

現地研究センターは、水俣市浜町の旧若草保育園を水俣市から借り受けて改装したもので、鉄筋コンクリート造2階建、延床面積300平方メートルの建物です。1階には展示、資料閲覧、談話スペース、2階には相談室、研究室、会議室が配置されています。正面玄関のスロープ、フラットな床、エレベーターの新設、赤外線補聴システムの設置など、バリアフリー/ユニバーサルデザインの視点からも可能な限りの配慮がなされています。

本センターは、文部科学省私立大学学術高度化推進事業オープン・リサーチ・センター整備事業として採択され設置されたもので、本学の水俣学研究プロジェ

クトの研究者・大学院生の研究拠点であると同時に、国内外の研究者にも広く開放された施設として利用できるように、また地元市民の皆さんにも気軽に足を運ぶことができる交流の場として活用していただきたいと考えています。

現地研究センターを担当することになりました私自身は、水俣病事件に直接的に向き合ってきたわけではありませんが、古くはチッソ労働者の労災職業病問題、また最近では水俣市第4次総合計画策定審議会（平成16～18年）、熊本県環境センター懇談会（平成16～17年）、芦北地域振興局子どもの食育パートナーシップ事業（平成15～19年）等を通して水俣・芦北地域と一定の関わりを持ってきました。これらの関わりの中で築いた多様な関係者とのつながりを大事にして、現地研究センターのこれからのあり方を探っていきたいと思います。「鍬で土を掘るんじゃなくて、へらで土を掘らなきゃだめですね」という記念講演会での谷川先生の言葉を肝に銘じて、水俣に生活する人々の声に耳を傾け、水俣の将来についての思いを共有することに努めながら、地域の潤滑油としての役割を果たしていきたいと考えています。

すばらしい建物が完成し、開所式を無事終える中で、現地研究センターを担当することの責任の重みをひしひしと感じています。また、一方では、新たな学としての水俣学を創り上げていく協働作業に加わることのできる喜びをかみしめています。

水俣学現地研究センター

開館日時：火曜～金曜日 10:00～16:00

休館日：日・月・土曜、祝日

本学創立記念日（5月30日）

大学の規定に定められた

年末年始および夏期休業期間

相談開催日時：毎月第2・4火曜 13:00～16:00

相談受付：開館日時に随時

健康・医療相談：担当 原田正純

生活・福祉相談：担当 中村俊也



住所：水俣市浜町2-7-13

Tel/Fax：0966-63-5030

Email：m-genchi@kumagaku.ac.jp

水俣学現地研究センター開所記念式典

冒頭の水俣学現地研究センター長、宮北隆志の挨拶にもあったが、8月8日水俣市浜町に水俣学現地研究センターが開所し、開所記念行事を開催した。

8月の猛暑の上、昼間の暑い時間帯にもかかわらず、多くの方が現地センターを訪れ、展示資料、建物内部を見学して下さった。開所記念行事には遠くは新潟や東京から、また、関西訴訟原告団長や支援者、水俣・芦北地域や鹿児島県から教育機関や行政機関、福祉関係者、水俣病被害者、支援者、民間企業、熊本県の行政機関、教育機関、また県外の大学教員、学生も参加するなど本当に幅広い方々が参加して下さった。

谷川先生記念講演には、多くの方が興味をもたれ、記念講演会だけでも参加したいという方も含め約200人が講演に聞き入った。

祝賀会には約150人の方が参加下さり、これからの水俣学現地研究センターへの期待や要望を水俣病被害者だけでなく、いろんな方から頂くことができた。水俣学がめざす研究拠点としての第一歩を踏み出す記念すべき一日であった。
(田尻 雅美)



記念式典での学長挨拶

2005年8月1日～9日

カナダ先住民を迎えて

カナダで水俣病が発生したオンタリオ州の先住民居留地グラッシェーナローズとホワイトドックから、被害者の先住民が各1人、カナダ在住の日本人支援者1人が通訳を兼ね、8/1～8/9の日程で熊本、水俣を訪れた。この2人は1975年にも水俣を訪問しており、今回は、熊本学園大学水俣学現地研究センター開所式参加と水俣病被害者との交流が目的で来日した。また、立命館アジア太平洋大学客員教授のアン・マクドナルドさん（カナダ出身）も助っ人として参加して下さった。

9日間の日程で、熊本県知事、水俣市長表敬訪問、熊本県水俣病対策課で学習会、熊本学園大学学長表敬訪問、熊本学園大学と水俣市内で水俣学研究センター公開セミナーへの参加、水俣病患者との交流、記者会見など中身の濃い訪問であった。

8月2日熊本県知事表敬訪問の後、熊本県水俣病対策課の方から、熊本における水俣病の救済策についてレクチャーして頂いた。通訳を含め1時間という短い時間であったが、質疑応答まで議論ができた。水俣病対策課の方々には時間をとっていただき感謝している。

3日水俣に移動、1975年に水俣を訪れて以来の水俣病患者との再会、交流が実現した。その他、水俣市立水俣病資料館、水俣協立病院訪問、愛林館、元水俣市長吉井さんの合鴨農法見学、漁船に乗って水俣病患者から水俣市の地形などの説明を受けるなど、充実した5日間であった。8日にチツソ水俣工場見学を依頼したが、夏祭りがあるため実現できなかったのが非常に残念であった。最後に水俣学現地研究センター開所式典参加後、帰国の途に着いた。
(田尻 雅美)



水俣湾海上視察中のカナダ先住民たち

電子データの資料保存をどうするか

社会福祉学部 教授 山本 尚友



水俣学研究センターが現在正式に受け入れている資料は、新日窒労働組合の旧蔵資料のみだが、水俣学という分野の広さからいって今後は、多種多様の資料を受け入れていかざるを得ないものと予想される。

図書といわれる書籍と逐次刊行物の他に、行政資料や地元の漁協あるいは患者団体や運動団体さらには個人の資料がまず思い浮かぶが、この他にも新聞記事、雑誌に掲載された関連論文なども抜かすことはできない。

このような文字資料の他に、写真や映画さらには録音テープなどの映像・音声資料も水俣に関連して、多く製作されており、これらの系統的収集も欠かせない。

また、今後の研究センターの調査・研究活動の中から生み出される、調査報告書や写真・ビデオさらにはインタビューの録音等も、センターの資料として位置づけ保全を図っていかなければいけない。

これらの、資料の整理方法については近日中に試案を作成して、検討していただこうと思っているが、最

近資料の整理・保存の観点から大きな問題となりつつあるのが、急増している電子データの資料である。

アメリカの議会図書館で初期に電子データ化した資料が、再生不可能になっているというニュースに接したのは、すでに十年以上前のことである。電子データというものは、それを作成したハードウェアなしには、基本的に再生出来ないことは周知のことであり、長期の保存には電子データは向いていない。

私自身はこれまで、電子データ作成した文字資料は必ず紙に印字したものを作成し、それを保存用としてきた。写真は電子カメラは試し取り用に使い、保存を目的とするものは生フィルムに撮影、音声は電子データで録音したものの内、長期保存が必要なもののみ、カセットテープにコピーして保存用としてきた。

しかし、滔々たる電子化のなかで、研究センターとしてどのような保存方法が最適なのか、研究員の皆さん方にもお知恵をおかしたい。

医療・福祉相談の開始にあたって

社会福祉学部 専任講師 中村 俊也



水俣学現地研究センターでは、10月から医療・福祉相談が開始された。私は福祉相談を受け持つこととなった。水俣で様々なことを学びたいという想いの他に、もし受け持つ資格があったら、私の専門がソーシャルワーク実践論であること、かつて主に「しょうがい」を持つ方への生活支援を福祉の現場で10年ほど実践してきたこと、現在は県社協地域福祉権利擁護契約締結委員や福祉施設の第三者苦情解決委員として活動しているからであろうか。

福祉相談では、生活上の困難さや不便さを、相談に来られた方と共同作業で少しでも実際に解決できればと思っている。また、水俣病は差別と偏見の歴史でもある。そのことによって損なわれた権利の回復や権利擁護も不可欠な課題であり、一緒に取り組んでいけたらとも思う。もちろん、解決できないことも多々あるだろうが、どんなことでも話を聞いてくれる存在には絶対になりたいと切望している。それが、今でもソーシャルワーカーでありたいと想い続けている私の願いである。

水俣病は公害により発生したことから、医療や認定をめぐる裁判がクローズアップされてきた。しかし、実際に生活上の困難さや不便さを軽減していく支援を考える際には、いわゆる一般的にいわれる「しょうがい」を持つ方への支援と変わりはない筈である。にもかかわらず水俣病にソーシャルワーカーが、この間に十分に関われなかった、あるいは関わろうとしてこなかったことについては忸怩たる思いである。もちろん、このことは私自身に跳ね返ってくるのだけれど。

最後にソーシャルワーカーの倫理綱領の前文を紹介しておきたい。「われわれ、ソーシャルワーカーは、平和擁護、個人の尊厳、民主主義という人類普遍の原理にのっとり、福祉専門職の知識、技術と価値観により、社会福祉の向上とクライアントの自己実現をめざす専門職であることを言明する。われわれは、社会の進歩発展による社会変動が、とすれば人間の疎外（反福祉）をもたらすことに着目する時、この専門職が福祉社会の維持、推進に不可欠の制度であることを自覚する」。

2005年8月2日、4日 水俣学研究センター第1回公開セミナー

「カナダ先住民(First Nations People)からの報告」

～水銀汚染、そしてリザーブの移転、森林の皆伐～

8月2日に熊本学園大学、また4日に水俣市総合体育館で第1回目となる水俣学研究センター公開セミナーを開催。両日合わせて100名余りの参加があった。

原田正純センター長の挨拶の後、2日は花田昌宣社会福祉学部長、4日は宮北隆志現地センター長が、カナダ先住民を取りまく概況について触れ、その後、カナダ先住民ビル・フォビスター氏、アンソニー・ヘンリー氏より詳しい現況や課題が報告された。

両氏の住むオンタリオ州の先住民居留地は、1873年に連邦政府と結ばれた条約により面積が激減。狭く密集した劣悪な環境の中で、伝統的な生活スタイルは失われつつある。また1950年代以降、ダム建設、居留地の移転、製紙工場による水銀汚染、森林伐採が相次ぎ、現在、先住民は失業や自然・生活基盤の破壊、健康被害など多くの問題を抱えている。今後、連邦政府や州政府の管轄区域を越えた対策が課題となる。

またカナダ在住の日本人支援者大類義氏より、2002年、2004年の水俣学プロジェクトによるカナダ水銀汚染中毒調査の様子が紹介され、調査団とカナダ政府との見解の相違なども指摘された。最後に参加者からも両氏の病状やカナダの認定制度に対する質問の他、若者の抱える問題、また後世へどのように伝えていくのかといった議論が交わされ終了した。(稲津 真理)



水俣市でのセミナー

2005年8月6日～8日

福祉環境学フィールドワークⅠ 水俣学現地研修に参加して

社会福祉学研究科博士課程 宮瀬 美津子

社会福祉学研究科では、大学院生の水俣学現地研修として「福祉環境学フィールドワークⅠ」という授業が設けられています。水俣学現地研究センターを拠点としたこの研修に参加して、水俣病被害の実態を肌で感じ多面的な視点から考察する機会を得ました。

8月6日 水俣病被害者互助会の学習会に参加。現在、40代～50代の患者認定申請者が急増していることやその理由について知り、「水俣病は終わっていない」ことを実感しました。夜は患者さんを囲んで懇談会。辛い症状や不安を率直に語って下さいました。

7日 水俣学現地研究センター及び相思社における水俣病検診に参加し、受診者やそのご家族からヒアリング。御所浦から来られた方も多く、不知火海一帯が汚染されていたことを改めて認識しました。夕方からは、水俣芦北公害研究サークルの先生方にヒアリング。学校現場における水俣病事件に関する学習の実態や、理不尽な差別の実情について伺いました。

8日 元新日本窒素労働組合役員よりヒアリング。会

社の歴史や労働争議の様子、水俣病訴訟における患者支援に至った経緯などについて伺いました。元組合事務所は数日後に閉鎖される予定になっており、その最後の来訪者となった私達が午後には水俣学現地研究センターのオープニング式典に参加したことは、水俣学に携わる者として感慨深いものがありました。

今回の研修に参加して、水俣病事件の実態解明はまだまだこれからの大きな研究課題であることを再認識すると共に、自らの果たすべき役割について強く意識する事ができたと感じています。



現地センターで討論する大学院生たち

2005年9月9日～12日 ～豊島・上勝・水島に学ぶ～

福祉環境フィールドワークⅡに参加して

社会福祉学研究科博士課程 永野 いつ香

2005年夏、熊本学園大学大学院の福祉環境学フィールドワークでは、現地の方の協力を得て、香川県豊島の産業廃棄物不法投棄現場・福祉関連施設（賀川豊彦ゆかりの地）・香川県直島環境センター・家プロジェクト・徳島県上勝町まちづくり推進課、ゼロウェイストアカデミー、介護予防活動センター・水島地域環境再生財団などを視察した。「豊島事件」の発端や違法操業に対する反対運動・公害調停の経緯や現在の状況、水島地域における公害の歴史やその後の取り組み、上勝町の地域ぐるみで行われている資源（ごみ）に対する取り組み等、それぞれの地域で学んだことを持ち帰り、水俣・芦北地域の今後の方向性を探ることが研修の目的であった。

中でも香川県豊島の産業廃棄物不法投棄問題は前から気になっていた。現場を見て、現地の方の話を聞き「人の尊厳より他のことを優先している水俣病事件と重なる部分がある」と感じた。1つには本来、不法投棄を監視し未然に防止すべき香川県が、逆に業者を擁護する形となってしまった結果、住民の訴えが聞き入れられないまま13年もの間大量の産業廃棄物が捨てられた事実。また、兵庫県警の摘発が世界中で報道

され、豊島は「ごみの島」として全国に知られることとなるのだが、その後「豊島問題は、本当はたいしたことはなく、ごく一部の人が騒いでいるのをマスコミがはやし立てている」と事件を矮小化しようとする動きや、「豊島産の農産物が売れなくなる」「豊島出身と名乗ることができない」など、被害を受けた島民が肩身の狭い思いをする理不尽なことが起きている。生産至上主義、効率化に重きを置き、心の豊かさを置き去りにしてきた資本主義社会の根本が、水俣・豊島・水島の歴史や現在に映し出されているのではないか。ものの豊かさのみを追い求めて現在に至る社会構造に目を向け、その歴史を1つ1つ丁寧に検証していくことを抜きにして、水俣・芦北地域における地域再生の方向性を探ることはできないことを、この研修を通して学んだ。



豊島の産業不法投棄の現場

「第22回天草環境会議」を水俣学研究センターと天草環境会議「はえん風」との共催で開催

（7月9日、10日、苓北町、志岐集会所）参加者170人。

開会の挨拶：花田昌宣（熊本学園大学社会福祉学部長）

シンポジウム『なぜ、今天草で水俣病か』

司会：原田正純（熊本学園大学）

- 関西訴訟最高裁判決を受けて
水俣病関西訴訟弁護団 小野田学（弁護士）
- 最高裁判決の意義 富樫貞夫（熊本学園大学）
- 新しい申請患者の実態 高岡 滋（協立病院）
- 第三水俣病問題を振り返る
宮沢信雄（関西訴訟を支える会）
- 溝口訴訟の現況 高倉史朗（溝口訴訟を支援する会）
- カナダ水俣病
アン・マグドナルド（立命館太平洋大学）
- アピール
人権救済申し立て 尾上利夫（出水の会）

その他、苓北火力発電のもつ問題（廃灰問題）

川辺川からのアピール 諫早湾からのアピール

（その内容は「環境と公害」、35巻2号（10月25日発行予定）に掲載）。

夜の星空大パーティはいつものように大盛況であった。

7月10日午前中（9：00～12：00）

「天草環境会議特別公開座談会」「水俣病は終わっていない」（於；志岐集会場）

〔司会〕寺西俊一（一橋大学、日本環境会議代表理事）
原田正純、淡路剛久（立教大学）、磯野弥生（東京経済大学）、高岡滋、宮沢信雄、小野田学。

（この座談会は「環境と公害」、35巻2号に掲載）

7月10日：午前中は「苓北火力発電所見学」

2005年8月27日～28日 大学院合宿

曾木発電所遺構の見学

社会福祉学部 教授 花田 昌宣

大学院社会福祉学研究科花田ゼミの合宿を水俣現地センターで行った。センターでの研究会の後、チッソ発祥の地、曾木発電所跡地（鹿児島県大口市）の見学を訪れた。

「ものものふのむかし語りを曾木の滝 水のしぶきにぬれつつぞきく」と柳原白蓮にうたわれた曾木の滝、遺構が残っているのは第二号発電所跡とのこと。チッソの創業者野口遵は1906年曾木電気株式会社を設立し、宮城県での経験を生かし、電力の産業への利用を目的として発電所を建設した。その二年後の1908年に地元の誘致を受けて水俣村に日本窒素肥料株式会社を設立、石灰窒素肥料の生産を開始した。その意味では、水俣病事件の始原としての意味を持つ発電所である。

1965年に鶴田ダムが完成し、通常はダムの湖底に沈んでいるのであるが、夏だけは水位を下げるため姿を表す。夕方に訪れたためか幽玄な雰囲気さえ漂う。現在、鹿児島県の産業遺産保全および観光開発を目的

とした補修事業が行われていて、足場が組まれていた。対岸には公園整備がなされていて、歴史を記した看板が設置してある。チッソのことには触れられているものの水俣病の記述はいっさいなかった。ましてや、チッソの安定賃金争議の後第一組合員が配転されていたことなど知られる由もない。



2005年8月 曾木発電所遺構

2005年8月27日～28日

宮崎市A地区コントロール検診

社会福祉学部 第二部 井上 ゆかり

調査場所：宮崎市A地区 調査人数：22名

調査目的：メチル水銀汚染されていない地区で水俣病多発地区と同じ検診をすることによって、汚染地域の住民の症状の特異性（メチル水銀暴露の影響の有無、程度）を明らかにする。

調査参加者：富樫（熊本学園大学教授）を含めて、水俣病研究会 鶴田、有馬、阿南、井出ら6名。熊本大学工学部村山研究室より4名、国水研より2名、熊本学園大学社会福祉学部4年生 井上の計13名。

調査対象：A地区、漁業に携る人とその家族200名予定。調査内容：家族構成・健康状態・漁業などについて調査票。神経内科診察、運動機能や識別覚などの検査、高次脳機能テスト、PCによる上肢機能評価システム（村山式）テスト。採血、血圧測定。毛髪水銀調査。

私は主に採血、血圧測定を担当した。年齢は、一番若い人が19歳で、あとは40歳代～80歳代であった。若い人の血圧は当然のことながら問題なかったが、やはり他の多くは、血圧が高目であった。高血圧を指

摘され内服中にもかかわらず、採血があるからと内服せずに来られたことのほか、漁業などの重労働をされる方は食生活において味付けが濃くなる傾向にあるからかと推測された。

うる覚えではあるが、確か89歳で現役の漁師の方がいらっしやった。病院で勤務する私は、当然の事ながら健康に何らかの不安を抱えた人を対象にしている。であるためか、その年代で大病せず現役の方がいらっしやること自体が驚きであった。一人で漁にでられているためか、腕相撲をしても私など足元にも及ばないほどガッシリした体格であった。89歳にもなると軽度の難聴は当然のことと思われるが、やや大きめの声で対応すれば問題なく会話が成立した。ビー玉検査では、1回では済まないかなという私の予想を裏切り、すんなり検査がおこなえた。失礼ながら、病院でこの年代を相手にする時こうはいかない。これが健康な人なのだとして強く印象に残った。

熊本学園大学 水俣学研究センター公開講座開講
「地域と福祉を考える」

開催日：11月11日～12月9日まで毎週金曜日
開催時間：18：30～20：30
場 所：水俣市公民館 研修室
対 象：水俣・芦北地域における福祉関係者、市民
定 員：50名
受講料：2500円（資料代として）

講座日程
11月11日 「社会福祉をどう考えるか」 花田昌宣
11月18日 「精神保健と社会福祉」 赤星香世子
11月25日 「障害者の地域における暮らし」 堀正嗣
12月2日 「地域福祉が拓く『誰もが安心して暮らせるまちづくり』」 高林秀明
12月9日 「老いを生きる意味」 天田城介

*申し込み、詳細についてのお問い合わせは、水俣学現地研究センター TEL・FAX 0966-63-5030 まで

水俣学研究センター日録

- 7月7日 日本学術会議シンポジウム報告
原田正純：「水俣病の問題から何を学び何を継承するか」
花田昌宣：「水俣の負の遺産を地域福祉に活かす」
- 9～10日 天草環境会議（水俣学研究センター共催）
- 19日 水俣学研究センター研究員会議
- 8月1日 カナダ先住民来熊
- 2日 カナダ先住民、熊本学園大学学長表敬訪問
熊本県知事表敬訪問
熊本県水俣病対策課にてヒアリング
第1回 水俣学研究センター公開セミナー
- 4日 第2回 水俣学研究センター公開セミナー
（於：水俣市総合体育館）
- 5～7日 カナダ先住民、水俣市長表敬訪問
水俣視察、水俣病患者宅訪問、交流など
- 6～8日 熊本学園大学大学院福祉環境学専攻フィールドワークⅠ（水俣現地調査）
- 8日 水俣学現地研究センター開所記念行事
- 10～13日 水俣学研究センター研究員、水俣・御所浦調査
- 12日 大阪市大木野ゼミ現地研究センター訪問
- 21日 新潟水俣病について考えるシンポジウム
原田正純講演（新潟市）
- 25日 水俣芦北人権教育研究大会（花田ゼミ参加）
- 26～28日 宮崎県A地区コントロール調査
（水俣病研究会と共同調査）
- 27～28日 大学院生水俣合宿
- 29日 2005年度水俣市人権教育現地学習会参加
- 9月5日 新潟水俣病語り部研修、現地研究センター視察
- 9～12日 大学院福祉環境学専攻フィールドワークⅡ
臨地研修（瀬戸内海地区）

- 20日 水俣学研究センター研究員会議
- 30日 慶応大学訪問現地案内

今後の活動予定

- 11月29日 公開セミナー「社会的経済と地域の発展」
ティエリー・ジャンテ（仏）
場所：熊本学園大学 図書館 AVホール
時間：14：00～
- 12月17日 日韓環境会議 於：熊本学園大学
- 1月7～8日 水俣病事件研究会 詳細未定
- 3月4～5日 九州環境教育ミーティング

水俣学関係新刊図書



原田正純編著
『水俣学講義 第2集』
日本評論社
2005年7月

編集後記

7月からはいつもにもまして多忙な日々、猛暑が続く中、本学の強力な支援体制のおかげで、8月8日現地研究センターを無事開所することができた。その後、9月中旬までは一人寂しい勤務であったが、水俣の人たちが何かと気にかけてセンターを訪れてくれるおかげで、救われた。深謝。10月から、現地研究センターに受付事務1人が採用され、孤独な勤務から解放された。徐々にではあるが体制が整ってきている。これからが楽しみだ。
(M・T)